

聖書之真理

第十四號

貳月號

主筆 江原萬里

目次

生くるの意義 信仰の解 主筆

如何にして他人の罪を正し得べきか

江原萬里

ロマ書の釋述 江原萬里

挨拶及感謝(下)

本書翰の大提唱(上)

基督者の獨立 藤本武平二

愛か信か 山田幸三郎

教育勅語滿四十年と内村鑑三先生 江原萬里

建築家の棄てた眞の礎石

柏木通信 齋藤宗次郎

「おこりんぼ」編輯餘録

おこりんぼ

最近私の身邊に面白い瑣事が起りました。私の近所に『おこりんぼ』と云はれて居る農家のある若者が居ます。其の家の所有地が丁度私の宅の眞向ひに在りまして、先日來その石垣を改築しました。ところが或る朝のことで、私が起き出ると、妻が今その若者が來て『お前さんのうちで私の方の石を盗んだから、警察に訴へるからそう思へ』と云つてアツアツ怒つて居ますが、あなたは御存じのことですか聞きます。私は何のこともかきつぱり解り兼ね門前に出て見ますと、成程門の側に、昨日散歩に出たときには氣付かなかつた一尺角の古い石塊が一つあるではありませんか。そこで私は『これは内ではちつとも知らないことだ、よく事情も調べずに近所に住んで居る者を泥棒よばはりすることは善くないよ』と言ひますと、『おこりんぼ』君は厄鬼になつて、『知られぬ筈があるけふ、石に足が生えて獨りて歩けやめいし、御めふさんのうちで指圖せればこゝに來る道理がねえ』と云ひます。

それから數日後、私の内に煙突掃除に來るこ屹度門の内外まで掃除して行くぢいさんが來ましたからそれに聞くと、それは私が山の方から拾うて來て置いたと申します。私の内の子供はぢいさんが下手の方から持つて來たのを見たこと申します。おこりんぼ君が眞向の地所から盗んだのだと言つて居ると三人の言ふところ皆石の田所が違ひますが、兎に角私が指圖して盗んだのではない事を煙突ぢいさんからよく話させました。そうすると其の晩おこりんぼ君が又來まして、假令他人が持つて來ても、法律ぢやお雇人のした事は主人のした事になるのだと理窟を言ひます。それで私は『お前さんは仲々法律に詳しいやうだが、煙突ぢいさんはうちの雇人ではないよ』と申しますと、ぐつと詰つて『覺えて居る』と言つて歸へりました。

此の種の短氣で短慮、然し正直で多分純眞な青年は何か思違ひをしたり、自分の氣に入らず、又少しも自分の利害に關連する事が起ると、よく事情を究めず、近所の者でも誰でも泥棒よばはりなします。こんな人は自分の純眞を信じて疑ひませんから、自分の友人で醜關係があるとの噂でも耳に入らうものならば、此の女郎と云つて一番先に石を投げます。そうして間違つたことが判明すると多分『覺えて居る』と云つて何か他の缺點を探し出し、それで自分の判断は少しも間違つて居なかつた事を證據立てやうとします。その卒直は敬服しますが、短見短慮、我執は感心出來ません。

襟柄は愛すべきものであります。人々が虚禮に流れて居るとき野人禮に馴はずと云へば、反つてそれが美德であるかの如くに聞えます。然し禮を失ふことは士君子として恥づべきこととあります。禮とは人格尊重であります。樂教は申しました、君子交を絶つとも惡聲を出さずと。況んや友人間に於て乎であります。

内村先生が教會をきらはれた大なる理由は、教會内に愛がない事、神に義せられた者同志を彼奴と云ひあの野郎がと呼び、君子人の口にすべからざることを平氣で言ふことにあつたやうです。宗教的眞理に關し、又其の他の事柄に關し意見の相違は已を得ず、これを發表する事は少しも差支ない事です。然し此の場合互に相手を尊敬し度いものであります。若し相手が道德上重大な過失をして居ると氣がついたならば、先づ懇ろに注意すべきであると思ひます。之なくば無教會主義とはつまらない主義であります。

兄弟よ、もし人の罪を認むることあらば、御靈に感じたる者、柔和なる心をもて之を正すべし。且おのおの自ら省みよ、恐らくは己も誘はるゝ事あらん。(ガラテヤ書六章一節)

聖書之眞理

第四十號

昭和六年二月一日發行

生くるの意義

生くるの意義は物的生活の幸福易樂にない。もつともつと精神的のものである。

されば自分が此の世の中で名譽を得、人望を博し、位置を得、富み榮え、家門繁昌し、子孫皆健やかに成長し、何一つの不足なき状態に在る事も必らずしも人生の意義を極めたりと言ひ得ない。その反對に、假令世に認められるところなく、反つて人に棄てられ、憎まれ、罵詈訕弄せられ、爲すこと悉く失敗し、生活は窮迫し、身は病に患み、家庭は破滅することありとも、尙生くるの意義がある。

『今の時にいたるまで我らは飢ゑ、渴き、また裸となり、また打たれ、定まれる住家なく、手づから働きて勞し、罵らるるときは祝し、責めらるるときは忍び、譏らるるときはオナメ勸をなせり。

我らは今に至るまで世の塵芥あぐたの如く、萬の物の垢のごとく爲なられたり』(『エリント前書四・十一節以下。)

之れ使徒パウロの述懐である。然かも誰かパウロ程ノーブルなる生活をなした者が他にあつたか。

人生は實に深い。測り知ることを得ない程深遠である。其の苦しみ、其の喜び、其の奥底に神の大なる愛の御攝理がある。『われ思ふに、今の時の苦難くるしみは、われらの上に顯れんとする榮光にくらぶるに足らず』(『ロマ書八・十八節である。されば只一人淋しく生くることも、世の人よりは垢の如くに思はるることも、主イエス・キリストを信じて神に義とせられなば、眞實成功の人生を送り得る。』

信仰の解

信仰とはある神學的理論を眞理として信ずることでない。『なんぢ神は唯一なりと信ずるか、斯く信ずるは善し、惡鬼も亦信じて慄おそけり』(ヤコブ二・一九)である。

又信仰とは嚴肅なる生活態度でもない。即ち、あらゆる打算を超越し、結果を顧みず、神の聖意と考へるところに従ひ、一意専心正しきを行ひ、人を愛し、只管自分の動機を純眞にする事でない。

信仰とは神の子イエスを信ずることである。『最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。今われ肉體に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給ひし神の子を信するに由りて生くるなり』之である。

それ故信仰とは、キリストを自己とすることであつて、自己中心に正反對のキリスト中心である。

『今いまし、昔いまし、後きたり給ふ主なる全能の神』(ヨハネ黙示録一・八)、嘗て人となりてガリラヤの湖畔に教へ、カルバリ丘上十字架に釘けられ、死して甦きより、昨日も今日もいつまでも活き給ふキリストが全宇宙の中央に輝き、又私自身となり給ふやう、己が全部を彼のものとすることである。彼の御名の崇められ給ふことが自分の唯一の願、最大の歡喜となることである。

此の信仰は己に對する彼の愛がわかつて始めて得られる。宛かも砂上に立てられた天幕の如く、少しの風雨に打たれても破滅し易き我らの弱き身體、生活、家庭、境遇のうち_に在つて、『我がために己が身を捨て給ひし』彼の聖愛と義がわかつて、彼の方が現在の自分より遙に善くなり、彼が自分に代つて生き給ふことが喜となり、そのためには何時でも己が生命を棄てることを厭はなくなつた時、その時確實に信仰を得たのである。

如何にして他人の

罪を正し得べきか

ガラテヤ書六章一節

江原萬里

他人の罪に對する各種の態度

如何なる時代にも世の罪惡、さては他人の惡行缺點を見て之に對する人々の態度に二種ある。

その第一は無關心である。かの度量海の如く、清濁併せ呑むと稱して、どんな罪惡が社會に瀾漫し、人々がどんな罪を犯そうと平然として之を容認するのがそれである。現代日本人の大多數はそれであつて、彼等は自分の犯した罪をやかましく言はないで黙つて庇護してくれる者を慕ひ、自分も亦自己の利益を害せず、評判を損じない限りそ

うする。道德を説く者は偏狹としてきはられ、窮窟として敬遠せられる。かくて姦通情死も美事となり、一黨のための收賄も是認せられ、階級間の反目嫉視も社會の進歩の一階梯とせられる。

此の清濁併呑主義者に對立して他方、世の罪惡又は他人の非行に極端なる潔癖家が居る。彼等は人の少しばかりの缺點すら之を觀遁がすことが出來ないで、ある者が一度罪を犯したと聞かば忽ち大なる憤恚いきごほりを發する。若し友人の間に起らば直ちに絶交して仕舞ふ。

前なる態度は道德的に自分の弱いことを自覺し且つ他人の非難を恐れる者に多きに反し、後なる態度を執る者は大い自分の純眞純潔を過信し、世の罪惡に汚染する危険なしと確信する者に多い。此の道德上の優越を自覺して居る者は道德上の弱い者に對する憐憫同情甚だ尠なく、將に躓いて地に倒れやうとする者を扶けやうとせず、地に倒れ

た者を起そうとしない。その味方となり、その非難を分担し、眞實善き兄弟たらしめやうとしない。反つて之に惡罵嘲弄をなし、以て地に突き倒し、再び立つことを得なく、兩者の間に永く怨恨、紛争、嫉妬、憤恚、徒黨、分離、異端、猜忌を置くのである。相手の缺點や失敗は自分の優越の飾りとして空しき譽を誇る。『神よ、我はほかの人の強奪・不義・姦淫するが如き者ならず、又この取税人の如くならぬを感謝す』(ルカ傳一八・一一)。

然るに眞の基督者の態度はその孰れにも屬しない。聖書は第一の態度即ち罪惡に無關心又は認容に反して教える。

我いふ、御靈によりて歩め、さらば肉の慾を遂げざるべし。……それ肉の行爲はあらはなり。即ち女淫行・汚穢・好色、金偶像崇拜・呪術、此等から生ずる怨恨・紛争・嫉妬・憤恚・徒黨・分離・異端・猜忌 又酒酔酒・宴樂なごの如し。

又第二の態度即ち、特定の信仰上の主義を標榜して相手を輕視惡罵し、喧嘩を賣り、虚しき自己優越の譽を求めんとする者に對しては

もし我ら御靈に由りて生きなば、御靈に由りて歩むべし。互に挑み、互に妬みて、虚しき譽を求むることを爲な(ガラテヤ書五・二五)。

抑も、聖書程人間の罪を白日に暴露し、其の將來の禍のどんなに怖るべきものであるかを嚴告するものはない。然かも又聖書程罪人に對する寛容と同情を教ゆるものもない。聖書は決して人間を完全なる者と見ない。誤り易く、陥り易く、眞に同情すべき弱い者と見る。一方に罪は嚴然たる人生の一大事實であつて、決して單なる煩惱の迷でなく、此の罪てふ事實がごの位人間の生涯を惱まして居て、これから救出されざる限り、その將來は實に怖るべき暗澹なるものであるかを明にすると同時に、宛かも名醫が患者の病根を直視し、

之を取除いて之を健康に復するやうに、人々をその罪から救済する道を示すのである。

兄弟よ、もし人の罪を認むることあらば、御靈に感じたる者、柔和なる心をもて之を正すべし。且おのおの自ら省みよ、恐らくは己も誘はるる事あらん。なんぢら互に重を負へ、而してキリストの律法を全うせよ（ガラテヤ書六・一）。

罪の事實とその重さ

もし人の罪を認むることあらば、然り、基督者は決して他人の罪を其の儘観過しない。罪は罪として明白に之を認め、決してその責任を他に轉嫁することを許さない。或は單純なる思違ひとし、或は境遇がそれをさしたとし、或は社會制度の責とする如き事を許さない。罪は各人の意志に由つて行はれ、各自の責任である事を明白に認める。

然し乍ら罪には重い罪と軽い罪とある。心中に

他を害し己を利とせんとする深い悪意を潜め、計畫的に之を實行し以て他人を傷け陥れ、社會を破壊する重い罪がある。されど又人は不用意のうち犯す軽い罪がある、基督者自身陥る罪は概して此の軽い罪である。舊譯の聖書には此の聖句の原語を『若しはからずも過に陥る者あらば』と譯してあるのは之を指す。例ばペテロが師の前で『假令みな躓くとも我は然らじ』と誓ひ乍ら、大祭司の中庭でその婢女に見とがめられ『なんぢも、かのナザレ人イエスと偕に居たり』と言はれた瞬間、不意を喰つて『われは其の人を知らず』と云つて師を否んだのはそれである（マルコ傳十四章参照）。

基督者が世に在つて堂々と自己はキリスト信者であることを明白にせず、或は酒席に、或は各種の會合に何らかの都合で之を秘す罪はこの罪である。それは極く軽い罪である。然し乍ら罪は罪である。それは一場の迷ではない。宛かも一度身を

損じた者はその傷害が後まで残るやうに、一度犯した罪は如何に軽い罪もその人の品性に影響し、心の重荷とならずば已まない。一度師を否んだべテロは、三度まで之を否むに至り、その重荷は益益強く感せられた。只一言の虚言過誤として之を繕はんとする第二第三の虚偽、他を欺き、自己を欺き、良心の聲を覆うて明白なる事實を否認し、眞實なる明るき世界に我れと我が眼を閉じ、獨り自ら虚偽の辯解、不實の行動、暗黒のうちに住むのである。彼らは或は聖書の句を引いて自分を辯護し、或は他人の罪を誹議し、或は人は皆罪人であると言ひて自分を他人の如く扱つて、眞實罪に悩む自己を欺こうとする。然かも欺きおはせることは出来ない。焦燥、陰鬱、孤獨、暗黒は之に伴ふ。是れ罪のもたらす大なる心の重荷である。

かくて次第に神に背き、正しき道を歩まず、自己の慾にまかせて自暴自棄の生活をするに至らば

假令それを自由獨立の生活と云ひ、自分には友は要なく、人の愛も不用、世は金である。金で買ひ得られぬ楽しみはないとて、種々の快樂を迫ふて之に耽けることも、その心中無限の孤獨、悲痛、暗黒を如何にせん。満さんとする程心中の空虚の大なるを知るのである。金は多くの楽しみを與へる。されど眞實なる人の心は金では買ひ得られない。金は多くの人を己に引つけ、その上に勢力を得さす。されど眞實の愛の人は金では來らない。それ故己に來る者は如何に親切に言寄るも皆其の奥底は利慾の動物であつて、自分から幾許かの利益を得やうとするごしか見えない。世に眞實の愛があらうとは思はれなくなる。凡てが虚偽、外見だけ、彼らはかくして金に飽かせた邸宅内に乞食にも劣る心の生活をするのである。

彼らはその淋しさに得堪えない。然しそれを告白して慰を求め人はあらず、又慰を得られもし

ない。宗教は弱者の氣休めのみ、我は強者であつて宗教の必要はないと言ひつつ、何處とも知らず弱者にも劣る身の弱さを感じて居る。遂にそれに堪ゆることを得ず、人間は必らず神佛の加護があるものと空頼みする。されど一度慾の動き來らばその神佛糞喰へご云ひて之を棄てる。眞に信頼する神あらず、人あらず、頼るべきものは只自己のみ、然かも自己の如何に弱き者なるかを感じたる時の悲痛、これ罪人の負ひつつある重荷である。

舊交復舊のみち

さらば如何にして此の人を『正し』得べきか。即ち元の明るき生活、樂しき交際に歸へらしめ得るか。それは其の人の苦しめる重荷を相互に荷ひその心を持ち上げて、之を『正し』得るのである。兄弟よ、もし人の罪を認むることあらば、御靈みたまに感じたる者、柔和なる心をもて之を正すべし。且

おのおの自らかへり省みよ、恐らくは誘はるる事あらん。なんぢら互に重おもきを負へ、而してキリストの律法を全うせよである。

さらば罪に苦しみ悩める者の重荷を負うて、之を元通りの樂しき交際に立ち還へらしめるに必要なるものは何か、それは眞の同情である。柔和なる心をもて之を正すべし。かの罪の重さを感じる者が眞實求めて已まないものは人の心からなる同情である、その柔和なる心である。彼らは自分の重荷に得堪えて、或は自分を辯解し、他人を惡罵し、又自分は強者であつて友は不要と大言壯言しつつ、その言下に洩れ來る無限の淋しさ、胸底深く潜む無限の暗黒は何かしら自分の言ふところに何人かの同感共鳴を求めて居るのである。眞實の同情こそ彼らが心の奥底で要求して居る唯一のものである。そして眞の基督者こそ此の同情を與へ得て、彼らを罪より元に還へし、再び樂しき元の

交際に立ち入らしめ得るのである。

基督者は柔和なる心を以て他人の罪に對する。

決して檢事が犯罪人の罪を論告するが如き態度を執らない。罪人の友となり給ひし神の子イエスの如く謙遜に、又その如くに柔和なる心を以て之に對する。イエスは言ひ給ふ。『凡て勞する者、重荷を負ふ者はわれに來れ、われ汝らを休ません。我は柔和にして心卑ければ、我が軛を負ひて我に學べ、さらば靈魂に休息を得ん。わが軛は易く、わが荷は輕ければなり』(マタイ傳十一章二八以下)。

此の柔和なる心、この同情は如何にして生ずるか、それは先づ第一におのおの自らを省みることに、恐らくは己も誘はるることあらんどの自己の弱き眞相を明白に悟ることから生ずる。人が罪を犯し、そのために憂苦懊惱をして居るのは他人事ではない。自分も亦屢々それと同様の又は別種の罪に誘はれ易く、度々それに陥る弱い者であることをつ

くづく實感した者にして始めて眞に他人の弱きに同情を寄せ、互にその重を負ひてキリストの律法を全うすることを得るのである。徒らに人の罪を責め誹る者は自己の弱きを知らないからである。

かかる者は人の罪を認むるも、それを『正す』こと即ち元の善き生活、樂しき交際に引返さすことをなさず、反つてその歸還の途を塞ぐ者である。

されど自分が同じやうな苦しみを經驗したと云ふだけでは必らずしも相手に對して同情は起らない。勤勉苦學力行して惡しき境遇から出立して、功を遂げた者には往々同じ境遇に在つて、或は勤勉足らず、或は聰明を缺ぎ、いつまでもそれから脱し得ない者に對して往々甚だ冷淡苛酷であつて之に對して同情の念の乏しき者が多くある。眞實罪に惱む者に對する同情は御靈に感じたる者之を有つ。此の者にして始めて柔和なる心をもてその罪を正すことが出来る。

さらば御靈に感じたる者とは誰か。『神は御子の御靈を我らの心に遣して「あば、父」と呼ばしめ給ふ』〔ガラテヤ書四章六〕。御靈に感じたる者とは己が罪が神の子キリストの苦難の故に赦され、神の子の生命を受けて神を父よと呼びて拜し奉り得るに至つた者である。父なる神の愛、主イエス・キリストの恩恵を眞實に味はつて、そこから來る御靈の交感を受けた者である。『御靈に感じたる者』御靈に由りて生くる者『御靈に由りて歩む者』この御靈こそは我らがキリストの十字架を仰いで我らの神に對する罪が悉く無條件に赦され神に無條件に愛され居る事を知つた時降下するのである。

神の御意以外何をも言ひ給はず、又行ひ給はず、神に對する絶對の信賴と服従とに由り、己を十字架に釘つけるまで憎める者を愛し、そのために己自ら代つて神の罰を受け、己が生命を悉く與へて今尙之を愛し護り導き給ふ、かかる絶對無邊無際

涯の愛なるキリストを、その愛の顯はれの極みなる十字架に於て仰ぎ見る時、我らは神の『御靈を感ずる』のである。そして此の愛のうちに全生涯を託して、我らは『御靈に由りて生くる』者となり、此の愛に勵まされて人生を歩む者之れ『御靈に由りて歩む』者である。

我等がなほ罪人たりし時、キリスト我等のために死に給ひしに由りて、神は我らに對する愛をあらはし給へり……然のみならず今われらに和睦を得させ給へる我らの主イエス・キリストに頼りて神を喜ぶなり〔ロマ書五章八節以下〕。

キリストの十字架の死に神の愛を知り、之に由りて神我ら罪人に對して和睦し給へることを感じた者、之れを眞の基督者と云ふ。かかる者にして始めて人の罪を認めたるごき、柔和なる心をもて之を正し、即ちその重を負うてキリストの律法を全うする事を得るのである。

ロマ書の釋述

江 原 萬 里

挨拶及び感謝 (下) 感謝と祈求

信仰に對する感謝

今ロマに在る諸君を思ひ、此の書を呈せんとして、何よりも先に私の心に溢れ出づるものは、神に對する大なる感謝である。

それは、汝らの信仰、全世界に言傳へられたれば、我まづ汝ら一同の爲に感謝するのである。諸君のうちユダヤ人と異邦人との差別はなく、又諸君のうち如何なる主義の相違があらうとも、少しも私の感謝を妨げない。私は諸君一同の爲に、我らの感謝祈禱讚美を神の聖前に執次ぎ給ふ大祭司イエス・キリストによりて我が神に感謝する。

何故の感謝か。それは諸君が主イエス・キリストを信せられたこと、世界大帝國の首府に在りて

その信仰を維持して居られる事、それが私には先づ何よりも大なる感謝である。主イエスは教え給ふた。『汝らは世の光なり。山の上にある町は隠るることなし。また人は燈火をこもし升の下におかず。燈臺の上におく。斯く燈火は家にある凡ての物を照すなり。斯のごとく汝らの光を人の前にかがやかせ。これ汝らが善き行爲を見て、天にいます汝らの父を崇めん爲なり』(マタイ傳五章十四以下)と。

七つの丘の上に立てる大帝國の首都、そこに輝く信仰の燈火は當に全世界に言傳へらるべきである。諸君が信仰を有ち且つ之を維持せられて居ると云ふ、單にそれだけで、私には神に對する大なる感謝である。

ロマ訪問の祈求

次に私は神に對して絶えず祈求めて居る一事がある。それは何日か諸君を訪問し度いこの願である。如何ばかり深く私は諸君のことを想つて居る

か、若しその證據が御入用ならば、私は神御自身にその證しをなし給はんことを求める。

前述べたやうに、その御子の福音を宣傳ふることに於て我が靈をもて、即ち儀式的でなく、靈と眞理とをもて私が事ふる神は、わが絶えず祈のうちには汝らを覺え、如何にしてか御意に隨ひ、いつか汝らに到るべき途を得んと、常に冀ふことを我がために證し給ふなり。如何ばかり熱心に、祈のうちには絶えず諸君のことを思出で、諸君を訪問するの機を與へられんことを願つて居るか、然かも神の御意未だそこになく、私の祈は聽かれぬ。されど私は祈の度毎に、ごうにかこうにかして、神の御意に適うて、近い内に遂に、諸君に會ふ途が開かれるやう冀うて已まないものである。

訪問を願ふ動機

然らば何故私はそんなに熱心に諸君訪問のことに絶えず切願して居るかと云ふに、**11** われ汝らを

見んことを切に望むは、汝らの堅せられん爲に靈の賜物を分け與へんとてなり。諸君の信仰いやが上にも堅固となり、生くること即ち主イエス・キリストに信賴となるに至らんが爲に、私は直接諸君に會うて、福音が持ち來らす諸種の靈的能力を御與へし度いからである。

實に私の宣傳ふる福音は只單に神に關する知識ではない。神の能力である。神は豊に私に此の能力を與へ給ひ、先般エペソ滞在中には、神は私の『手によりて尋常ならぬ能力ある業を行』はしめ給ふた。病める者は『病去り、惡靈は出で』、此がためアジャ全體に神の福音が廣まつたのである（使徒十九章九以下）。又今此の書翰を口授しつつある此のコリント市に於ても、同じく『御靈の顯現』があつて、『或人は智慧の言を賜り、或人は知識の言、或人は信仰、ある人は病を醫す賜物、或人は異能ある業、ある人は預言』する能力を賜はつた。

『凡て此等のことは同じ一つの御靈の活動にして御靈その心に隨ひて各人に分與へたまふ』(コリント前十二章)のである。

私自身此の驚くべき御能力を受けた。そして諸君を訪問することを熱望するのは、諸君の信仰が益々堅固なられるために此等の靈の賜物を諸君に分與へ度いからである。凡て私の宣傳ふる福音を心底から信受する者には、此の御靈による賜物が降るのである。今まで氣付かなかつた各自生來の能力は大に伸び、潜める天才は發揮され、又新に異能が賦與せられ、創造力が出る。主イエスは言ひ給ふた。『我を信する者は、聖書に言へることく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし』(ヨハネ傳七章三八)と。嘗に私ばかりではない。何人とも雖もキリストを信する時かかる能力を得るのである。そして其の者が更に之を他に分與し得て、その靈的感化の中心となり得るのである。

それ故私が諸君を訪問する事を切願して居るのは、只私が諸君に私の有てる靈的能力を分與し度いと云ふだけに止まらない。『靈の賜物を分け與へんとてなり』と云ふたのは、12 即ち、もつと適切に云へば、我なんぢらの中にありて互の信仰によりて相共に慰められん爲なりである。諸君も亦私に分け與へ下さる何物かがある。諸君は只之を受けるだけではない。されば私が諸君を訪問して靈の賜物を分け與へ度いと云つたのは、結局、諸君と親しく相交はり、諸君の中にありて私自身が勵まされ度い、慰め力づけられ度い、否々、相互にその信仰によつて勵まし、勵まされつし度いと云ふことに外ならないのである。

13 兄弟よ、主に在りて親愛なる諸君よ、私が貴地訪問を願つてゐることは只一場の氣まぐれ沙汰ではない。それは前申し述べたやうに、私は『召されて使徒となり、神の福音のために選り別たれ、

もろもろの國人を信仰に従順ならしめんごとて、彼より恩恵と使徒の職つとめを受け』たからである。これがため私は今までアジャ、マセドニア、ギリシヤの各地を歴訪して福音を宣傳へ、人々の信仰を喚起せしめ、又既に信せる者の信仰を堅くした。その如く私は私の職務によつて諸君の中からも亦同様の實、即ち靈的收獲を得度いのである。

されば貴地訪問の願は今まで多くの事情のために妨げられたけれども、少しも之を抛棄しない。我ほかの異邦人の中うちより得し如く汝らの中よりも實を得んとて屢しばしば次に往かんとしたれど、今に至りてなほ妨げらる。私にかくまで切なる願望のある此の事を汝らの知らざるを欲せず。どうぞ此の事を御承知願ひ度い。

實は私は嘗に諸君のみではなく、全世界の人に神の嘉信を宣傳ふる義務を有する者である。14 我はギリシヤ人にも夷人あひすにも智かしてき者にも愚なる者に

も負債おひめあり。敢て諸君を野蠻人と云ひ又愚者と云ふのではない。私の福音宣傳の範圍は全人類の無制限であり、人種の差別、言語の相違、文化の懸隔、老若男女、貧富賢愚、名聞ある者と聞えよからぬ者と、それらの差別は少しもない。たゞ人であれば足る。私は此の凡ての人に對してキリストが負はしめたまふた私の果すべき職務があるのである。

15 この故に我はロマに在る汝らにも福音を宣傳へんことを頻りに願ふなり。諸君に福音を宣傳ふるの熱心は私の私情から出でない。主イエス・キリストに對する此の義務から生するのである。私は神の嘉ばしき音づれを全世界に宣傳へ、萬民の福祉に係はる此の大使命を果さなければならぬ。この故に神の御意に適ひ、その命令一下、直ちに貴地を訪問し、親しく貴地に諸君と相會して、我が福音をお傳へし度いと願ふこと甚だ切である。

本書翰の大提唱 (上)

福音を聴させず

それ故、私が今に至るも尙貴地を訪問し得ない理由は、貴地に於て堂々として我が福音を宣傳へる事をおぢ、憚り、躊躇して居るからではない。

其の武備は千里の邊境を壓し、其の交通は四通八達、凡ての道路は悉く貴地に到り、七丘の上厳然ロマ大帝國の首府として立てる貴地は、世界のあらゆる文化の精粹を鐘め、哲學に、法律に、文藝に、産業に、その隆昌はまことに人類歴史の偉觀である。此の大帝國の主權を一身に掌握する皇帝はあきつ神として崇拜せられ、億兆の民草は悉く其の前に威服して敢て頭を上ぐる者もない。

此の大帝都に於て、ユダヤの邊陲ナザレの村に大工の子として生ひ立ち、ロマより派遣された總督ピラトによつて反逆罪の故に死刑の宣告を受け、

十字架上に死し給ふたイエスを、神の御子とし、全人類の救主、諸王の王とし、衆人皆之に信從せよと宣傳する福音はロマ人には狂氣沙汰としか思はれないであらう。

又今に大救世主出現し、ロマに優る世界大帝國を建設し、其の物質的繁榮は極まりなく、『神の友』アブラハムの子孫は狼に育てられたロムルスの子孫の創造せる文化、その建設せる帝國以上の國と文化とを創造し、長久に正義と公平とを以て萬民を統御するの日を仰望せるユダヤ人には彼等の救世主出現して十字架の上に死し給ふた福音ふる福音は大なる蹟物つまづきである。

更に又深遠なるプラトンの哲學、精微なるアリストテレスの理學に養はれ、宇宙萬有に關する雄大なる知識的大綜合、その大系統の樹立を以て人間至上の事業と思惟するギリシヤ人には、我が宣傳ふる福音は愚の骨頂と見えるであらう。

されど¹⁸我は福音を恥とせず、之を大帝國の首都に於て堂々と憚からずして宣傳へんことを欲する者である。

私も嘗ては十字架に死刑に處せられ給ふたナザレのイエスを救世主とし、又神の御子として宣傳ふる者を目して、ユダヤの國粹、イスラエルの光榮に泥を塗る者として憤激自ら制することを得ず、かかる冒瀆を敢てする者は男女にかかはらず『縛りて獄に入れ、死にまで至らしめし』ことは、大祭司も凡ての長老も我れに就きて證す』るところである。然るに一日、『ダマスコに寓る者どもを縛り、エルサレムに曳き來りて罰を受けしめん』とて彼處にゆける』とき、その城外に至るや『急ち大なる光天より出でて我を環り照せり。その時われ地に倒れ』た。そして『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するや刺ある策を蹴るは難し』と云ふ御聲を聞いたのである。私は此の時十字架の屈辱の死より

復活し給へる榮光の主イエスを我が肉眼にて見奉つた。彼は私に命じ給ふた。

われは汝が迫害するイエスなり。起きて汝の足にて立て、わが汝に現はれしは、汝をたてて其の見しことごと、我が汝に現れて示さんとする事この役者また證人たらしめん爲なり。

我なんちを此の民および異邦人より救はん、又なんちを彼らに遣し、その目をひらきて暗より光に、サタンの權威より神に立ち歸らせ、我に對する信仰によりて罪の赦と潔められたる者のうちの嗣業とを得しめん（以上使徒行傳二十二章及二十六章）。

之によつて私はキリストの迫害者よりその奴隸に豹變した。そして又同時に彼の全權大使として召され、此の福音をユダヤ人のみならず、萬民に宣傳すべき使命を受けたのである。私はどうして此の福音を恥としやうや。

救を得さす神の力

實に、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信する者に救を得さす神の力たればなり。まことに我の福音宣傳は私自身から出た私の力ではない。神が私の背後に在りて私をして之を宣傳せしめ、何人とも雖も此の福音のうちに啓示せられたる神の御子、主イエス・キリストを信する凡ての者を救に至らしめ給ふところの神の大なる原動力である。

それは宛も太陽の光輝き出で生きとし生ける者を照し、之を化育成長せしめる如く、萬民に對する此の福音宣傳は神から出た大なるエネルギーである。此の力はいかの辯證法的に進展して人類社會に共產制度を出現せしむるに唱ふるが如き物的機械力ではない。それは天地萬物の創造主、あらゆる生命の根源、義にして愛なる神の靈的救活力である。神が天地と人間とを創造し給ふ前、救を得さ

せん。既に預知預定し給へる者を今召し出し、召したる者をして主イエス・キリストを信せしめ、凡て信する者を義人とし、義とせられたる者を潔め、聖潔を得たる者に永遠不朽の生命を與へ給ふ、福音宣傳は實に神のかかる力である。それは救を得さすべく神から預定せられた者に對する神の召集令である。

されば神の此の召集に應じて福音のうちに示されたる主イエス・キリストを信するに至つた凡ての者は必ず救を得させられる。その靈魂とその身體とは永遠の刑罰を免れ、沈淪、滅亡の運命から救出され、靈魂は聖潔を得、身體は不朽の質を帯びて遂に永遠の生命に至り、神の榮光の輝き出づる新天新地を嗣いで我等の長子キリストを中心とする神の聖なる家族、義と愛に溢るる完全社會を形成し、天地萬物を支配するに至るのである。福音は實にかかる大なる救を得させる神の力である。

それは只單に階級制度が撤廢され、又貧乏が根絶さると云ふだけではない。人間が人間として有するあらゆる高尚なる願望が悉く満足され、靈肉共に完成し、永遠の世界の出現を得させる神の力である。

凡て信する者

されば此の福音こそは救世主の出現を期待せるユダヤ人を始めギリシヤ人其の他凡て理想的黄金社會の出現を仰望せる世界各種の國民を其の内に包容せるロマ帝國の首都に於てこそ當に宣傳へらるに相應しきものではないか。

然り、何人ど雖もロマ皇帝の支配に服する者はロマ帝國の臣民である。その如く何人ど雖も凡て信する者、更に正確に之を言へば、凡て主イエス・キリストを信する者は悉く神の國の民即ち聖徒である。私が此の書翰で信する者と云ふときは、きつと福音のうちに示されたる主イエス・キリスト

を信する者の謂であることに御注意を乞ひ度い。信するとは只單に神を信することではない。其の道德的至上律に服ふことでもない。又聖書其の者を眞理とすることでもない。福音が示す主イエス・キリストを己が救主として認め、之に一生を託し奉ることである。

兄弟よ、曩にわが傳へし福音を更に復なんちらに示す。汝らは之を受け、之に頼りて立ちたり。なんぢら徒らに信せずして我が傳へしまゝを堅く守らば、この福音に由りて救はれん。

わが第一に汝らに傳へしは我が受けし所にしてキリスト聖書に應じて我らの罪のために死に、また葬られ、聖書に應じて三日めに甦へり、ケバに現はれ、後十二の弟子に現はれ給ひし事なり（コリント後書十五章一以下）。

信の對象は即ち人格であつて、理でない。福音は信の對象たる此の人格が如何なる方であるかを

示すものであつて、それは教訓でもなく哲理でもない。されば信する者は我ら各自の罪のために十字架の苦難を受けてそれから復活し給ふて、現在我らを愛し護り導き、我らの祈求を悉く神に執成し給ふ今活ける榮光の主イエス・キリストに我らの一切を舉げて信賴し、彼を我が凡てとする事である。我が世に在りて爲すべきことは彼悉く成し給ひ、今後我らを完成し給ふ彼に在りて生くることである。福音は我らに示すに、彼は我らと同じ人性を有し給ふと同時に又人以上神の御子として示す。『神はその生み給へる獨子を世に賜ふ程に我らを愛し給へり』(ヨハネ傳三章十六)。彼に全生を托することは即ち神に信賴することである。

信仰とは神の我らに賜へる此の大なる救主、神の子イエスに信賴することである。信するには自分身如何なる身分なるかを問はない。心の純真なる者も、罪のため淪落し、其の身も魂も腐れ果

て、その生活は破滅せる者も、或は貴族、或は勞働者、或は文明人、或は野蠻人、其の他己が身につける何らの缺陷、それらは少しも信すること、即ち神にして人なるイエス・キリストを信仰することに益にもならず。妨にもならない。彼は我らが神に對する一切の罪を負ひて、我ら各自に代つてそのために死し、死より甦り給ふた。かかる絶大の愛なる救主に全幅の信賴をなすこと、このことを勧めるこの福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信する者に救を得さす神の力である。

われは近くに在る神にして、

遠きに在る神ならんや。

誰か密かなる處に身を匿し、

われに見られざることを得ん。

我は天地に充つるならずや、

エホバかく言ひ給ふ。

基督者の獨立

藤 本 武 平 二

人は獨立するの必要がある。獨立し得ざる人は眞の人たるの資格を有しない、基督者も亦獨立するの必要がある、獨立し得ざる信者は眞の信者たるの資格を有しない。人としての勤勉努力も、信者としての悔改精進も、是れ全く眞の獨立を得んがためであつて、人生の目的は一つにこの獨立を得るにありといふことができる。

獨立に二種がある。一つは人としての獨立であつて、他の一つは基督者としての獨立である。等しく獨立ではあるが、この二者は根本的に其内容を異にする。人としての獨立とは自己の良心が完全_に自己を支配しその主となつてゐるのをいふのである。自分が自分の主となつてゐるのであるから之を自主獨立の人といふことができる。然し基

督者としての獨立はこれと正反對である。基督者としての獨立とは、良心が其支配權を神に委ね、神をして自己の主たらしめ、良心は單に神の命に従ふものとなつたのをいふのである。故に信者の獨立といふのは實は自主となるのではなく、神の奴隸又神の僕となるのをいふのである。一つは良心をして自己を支配せしめ、一つは神をして良心及自己を支配せしむるをいふのであつて、二者其の内容を根本的に異にする。

人或はいふであらう。『何故に基督者は人としての獨立權を放棄し、腰を屈して神の前に跪くのであらうか、それでは基督者とは獨立人の謂ひにあらずして、屈從者・意氣地なし・奴隸の別名ではないか』と。

借問す、『人としての獨立といふも、果して人は人として眞に獨立し得るものなりや、誰か眞に良心をして自己を完全に支配せしめ、道德的完全の

人となり得るものぞ。『義人あるなし、一人もあるなし』とあるではないか。誰れか自らを偽ることなくして自己の獨立人たることを證言し得よう。

パウロさへ『我が欲する所は之を爲さず、反つて我が憎むところは之を爲すなり』と歎じ、又『わが肢體のうちには他の法ありて我が心の法と戦ひ、われを肢體の中にある罪の法の下に虜とするを見る』と悲んだではないか。是れこそ良心が自己を支配することの不可能にして人としての獨立がパウロにすらもできなかつたことを明示するものではないか。

良心に従つて行爲し、道德的完全の人となり、獨立の人とならんとは萬人の切なる願である。嘗ては吾々も義人たらんと欲して良心の命するままに如何ばかり徳行を勵んだことか、抑も吾々の基督教に走つたのは道德的行爲を完全に行ひ、人としての完全なる獨立を得んがためではなかつたか。

良心の命令は絶えず峻厳に發せられたが肉は頑として之に應じなかつた。いつも良心は肉との激戦に敗れた、精も魂も盡き果てて絶望の谷底に呻いた、吾々は遂に惡魔の嘲笑と凱歌を聞いて無念の涙を呑んだ。然し此の時である。吾々は幽かにキリストの優しい御聲を聞いた『凡て勞する者・重荷を負ふ者、われに來れ、われ汝等を休ません』と。又パウロの囁きを聞いた『我らは思ふ、人の義とせらるるは、律法の行爲によらず、信仰によるなり』と、又『功なくして神の恩恵により、キリスト・イエスにある贖罪によりて義とせらるるなり』と。綿のように疲れ果てた吾々はこの御聲を聞いて急に力の全身に漲るを覺えた、見上ぐればそこにはキリストの十字架が輝き、天の使は高らかに休戦喇叭を鳴り響かせてゐるではないか、萬物は一變した、この瞬間に靈と肉との激戦は止み、行爲により義人たらんと努力も、良心をし

て自己の支配者たらしめんとの焦慮も凡べて止んだ。吾々はただ良心の城門を開いてキリストを迎へ入れ、城頭高く十字の御旗をかかげ、凡べての權をキリストに委ね奉るのみとなつた。かくして吾々は今やキリストの屬もつとなり、この汚れし身はキリストの宮となるに至つた。我等は『最早や我れ生くるにあらず、キリスト我にありて生くるなり』との意識を持つに至つた。キリストの靈に充たされた良心は今や自己を完全に支配する力を持つに至り、吾々が嘗て願ひし人としての獨立以上の永遠の生命ある獨立が基督信者たる吾々の中に完成したのである。而して人としての獨立も願はざるに自おのづから吾々の中に成就したのである。彼のクロムエルの如き世に最も男らしく又最も人間らしい獨立人は基督信者の中にのみ見得るのである。

基者督の獨立とは決して物質的獨立を意味する

ものではない。故に吾々は官公署に仕ふべき官公吏の身であつても、又社長の命に服従すべき社員員の身であつても、或は又主人に使役せらるる下婢奴僕婢の身であつても、よし又金錢で賣買せらるる奴隷の身であつても、或は又君臣父子夫婦の關係に於て互に束縛せらるる身であつても、基督者としての獨立は毫も阻害さるるものでない。吾々は農民の作りし穀物と野菜とを食し、借家生活することも吾々の眞の獨立は何の影響も受けないのである。かかる物質的肉的形而下學的の獨立をなす事は、人が社會的生活をなす以上到底不可能のことである。よし又之をなし得たとしても、かかる物質的獨立はこの世的の事であつて何の價値もない事である。

人はよくいふ、自由自由と。誰れか自由を欲しないものがあらうか。然し多くの人は考へる、先づ人としての獨立を得て然る後自由は來るもので

ある。然るに人は人としての完全なる獨立をなし得るものではないから、人は遂に自由を獲る事ができない。之に反し基督者は自ら進んで自己の自由を放擲し神の奴隷となることにより眞の獨立を遂げ、その結果として神より眞の自由を頂く事ができる。身分が官公吏會社員又は下婢奴僕であり或は君臣父子の關係に繋がるものであつても、或は又吾々の環境が如何なるものであつても、よし吾々の屬する國が獨立國でなくとも、吾々は基督者たる事により眞の自由を惠まるるのである。

マルキストは物質の共產により獨立と自由を人類に持ち來し得るものと夢みつつある。然るに分配制度の組織化と人間を物質或は器械視したる結果生まれたものは自由ではなくして農民の奴隷化であり、專制政治の出現であつた。萬有を神の屬と認めざる唯物論者が神に抗して孤立して何事をもなし能はざるは必然である。人類の凡べてが

神と偕に在りて眞の獨立をなし得た時始めて人類はキリストに在りて一つとなり、萬物を継ぎ、永生に入り、眞の自由を與へらるのである。

神の奴隷となる事が、眞に獨立する事であり、自由を得る途である事を知つた吾々は、最早や倫理道德を守る事により人としての獨立即ち神なき孤立を願はないであらう。又この世の財寶を蓄積して經濟的獨立を計らうとしないであらう。或は我等に感化を及ぼす怖ある環境から身を遠くる事により我等の信仰的獨立を維持せんと勉めないであらう。ただ我等はこの一事を努めるであらう、我等の最も大事とする心そのものを何等の條件なしに神に捧げて、神を我が内に迎へ奉り、神より永遠の生命ある獨立と自由を受けん事を。

愛 か 信 か

(ルカ傳七章三〇—五〇)

山 田 幸 三 郎

ある町に札付きの罪人として知られた一人の女が住んでゐた。併してその實、彼女は自ら罪人の友といふ宣言を以て出現したる神の獨子の福音によつて、まだつい近頃その罪を悔ひ改めたばかりの身であつた。悪事千里を走つて傳はるが善事の認めらるゝは容易の事ではない。彼女は、己が罪の赦しの福音を宣べ知らしめくれた救主に向つて湧き溢るゝ感謝の念と、燃えるやうな思慕の情とを胸にたゞへては居るものゝ、その美しき心情を知る者としては誰一人もなかつた。

然るにある日のこと、その救主は彼女の町に來て、或る家に客となり給ふた。がその家は人もあらうに、平素から舊約聖書律法の嚴守を唯一の誇

として、彼女を最も露骨に輕蔑し、畜生にも劣る罪人として擯斥してゐたパリサイ人の家であつた。

併し熾烈なる憧憬に驅られた彼女は、世間の外聞や冷笑を憚り恐れるの餘裕を持たなかつた。彼女はただ香油の入りたる壺を携へたのみで、取るものも取りあへずイエスをそのパリサイ人の家に訪ね、『泣きつつ御足近く後に立ち、涙にて御足を濕ほし、己が頭の髮にて之を拭ひ、又御足に接吻して更に香油を抹つた』。長き間せきとめられてゐた感謝の勃發は、彼女をして殆んど我を忘れるばかりに自由奔放な行動に出でしめた。

而もそれは純眞なる感謝の情と愛との發現に外ならなかつたが故に、そこには彼女の前身を裏切るやうな下卑な汚點は毫も認められなかつた。靈眼よくその至純な心根を看取し給ふたイエスは、パリサイ人に向つて

『この女の多くの罪は赦されたり。その愛す

ること大なればなり。赦さるる事の少き者は、その愛する事もまた少し』(ルカ傳七章四八)と宣ふた。

まことに美しき事跡である。物語りの天才ルカは、一讀よくその光景を彷彿せしめて、容易に消え去らぬ記憶を我らの脳裏に刻みつける。

しかし乍らイエスのこの聖言を少しく注意して観る時には、筋路の立たない或物のそこに潜んでゐる事が感づかれるのを如何ともし難い。蓋しそれは、その前半に於ては、愛する事の大きな結果として罪が赦された事を教へると共に、後半に於ては、赦されし結果として愛するのである事を告ぐるからである。之を原語について見れば、前半に於て『なればなり』と譯されてゐる接續詞が、やはり事實的・行爲的原因を表はす語であつて、論理的の理由を表はす語ではない。

もし之が論理上の理由を表はす語であるならば、

この前半は、この女の罪が赦されたといふ事實が、この女の大きい愛するといふ事を理由にして推論されるのであるから、後半と併立して首尾一貫し、理路がよく通る事になるのである。

之に反して若し原語に拘泥して解釋するならば、行爲に表はしたる愛によつて罪が赦されるといふ事になり、人の救は道德行爲による事になり、従つてヤコブ書的に律法臭くなり、舊約に逆戻りする事になつて了ふのである。

要するに原語によれば、前半は舊約的であり、後半は先づ無條件に赦されてその結果愛するを得るに至ると教へるのだから、新約的福音的になるのである。而も兩者ともに主の聖唇から洩れた語である。イエスは一體かゝる矛盾したる言を發し給ふたのであらうか。

ドイツ譯を見るにルツターの面影を傳へる國定譯聖書も、シターゲの現代語譯も共に等しく前半

を、論理的理由の接續詞を用ひて、後半とあはせて條理を一貫せしめてゐる。これらの譯者は、ルッターとさへ言へば或る一派の人々が盲目的に非難したがるやうに、果してこの點に於ても亦、聖書を誤譯——曲譯して民衆を欺く者であらうか。

もしイエスが眞に斯く語り給ふた——眞にかの接續詞をこゝに用ひ給ふたとすれば、此等のドイツ譯は聖書を曲げて譯したといふ譏を免れないであらう。それと共にキリスト御自身の教には、行爲主義が少くとも半分を占め、従つてそれは純福音とは言はれがたくなるのである。實際また『心を盡し思ひを盡し精神を盡し力を盡して神を愛し、己が隣人を愛する』事を力説したイエスの聖言は、福音書中の方々に見當たるのである。

けれども確實なる一事は、福音書の中のイエスの聖言が、一語一句といふ調子で直弟子達が即記したものでないといふ事である。同時にまた福

音書の記者等が福音書を綴つたのも、聖靈に導かれて書いたといふものゝ、接續詞の使ひ方迄も逐語的に口授されて書いたものでは無い事も言ふ迄もあるまい。既に然りとすれば、かの接續詞をイエスが實際用ひ給ふたのだこの證明は立たないのである。

之は恐らく記者が自分の信仰から、イエスの福音をかゝるものと解釋して、或は又不注意に、この接續詞を用ひたものであらう。言語といふものは、随分不注意に用ひられるものである。従つてこの一節の前半は、寧ろ原語を捨て、ドイツ譯の如くに解釋し、首尾一貫せる意味に讀むべきではなからうか。

現にこの一條の物語りを全體に亘つて通讀する時には、四一—四三節に於ても、五〇節に於ても、先づ無條件に赦され、而してその赦しを信受し、その恩恵に感激して、その結果としてこゝに始め

て愛するに至り、救を確實に握るに至るものである事を主は繰返して訓へ給ふてゐる。して見ればかの原語の接續詞を捨て、寧ろ論理上の理由を表はす意味に解する事は、單に後半に合致せしめるといふのみではなく、この一條の物語り全體の精神に合はせる事を意味し、従つてそれは福音の根本義に調和する所以と言ふ事が出来やう。

又既述の愛を力説したる主の聖言と雖も、それらをその前後の關係の中に於て全體としてその意味をよく觀察して見るならば、我らの側からの愛が原因となつて罪を赦され救はれるといふ事を主眼として教へたものでない事は疑を容れないのである。

而して我ら自らの信仰實驗は、淺い乍らにも之を立證する。我らは先づ愛して然る後赦されたのではない。赦されて信じ愛するに至つたのである。赦されたる己が罪の深く重きを知れば知る程、神

と人とに對して愛が深まるのである。

この事を思ふ時、人に愛少きを責め又は恨む心は消える。自分が愛する事多くとも誇る事は出来ない。多く赦されたるが故に多く愛するのであり、愛し得るは赦されたる事の證據なるを思ふて、益々感謝するのみである。

聖書を一々原語について研究するのは結構である。併し字句の末に拘泥してイエスの精神を見落したら、論語讀みの論語知らずである。『文字は殺し靈は活かす』(コリント後書三・六)。原語研究よりもヨリ大切な事は精神である事を忘れてはならぬ。願はくば聖書の字句を見ずして常にイエスの精神を見たいものである。

教育勅語滿四十年と

内村鑑三先生（下）

建築家の棄てた眞の礎石

江原萬里

由來眞の預言者はその家郷に尊ばれない。されど其の者が眞の預言者であるならば、彼の眞價値は早晚知られるのである。今や憂慮すべき世相を視て、我が國民は嘗て國賊として不敬漢として之に石を投げた内村先生こそは眞の預言者であり、其の一生を献げて唱道したキリストの純福音こそは眞に我が興國の基礎であることを悟らんごしつある。若し今にして之を悟らずは、やがて悟ることの遅かりしことを悔ゆる時が来るであらう。

私は今年本誌に『イエス・キリストこそその十字架』について引續き論述し、キリストの十字架の

意義を闡明し度く思ふ。又今年はエレミヤの生涯とパウロの 로마人に與へた書翰の解説、オリバー・クロムエルと清教徒の英國支配、及び内村先生の所説に關する記事を掲載する予定である。

此等の記事は全く個々別々、其の間何等の連絡なきものではない。これらは互に一つの主張によつて連絡されて居るのである。主イエス・キリストも預言者エレミヤも使徒パウロも護國卿オリバー・クロムエルも又内村先生も國人よりは皆國賊として待遇せられ乍ら、然かもそれが皆其の國の國粹を代表し、其の精華を發揮し、眞精神を發揚したことに於て悉く同一である。

イエスは實に當時の國粹主義者バリサイ人よりしてユダヤの國粹であるモーセの律法を輕蔑し、自らを神に等しき者とする大不敬漢、大國賊とせられ、當時の支配者たるサドカイ人よりしては民の反亂を煽動する者とせられ、己が國が產出した

最も高貴なる彼は敵人ロマに付され、十字架に釘けられ給ふたのである。然かも此のナザレのイエスこそは彼らが永き間待ち望んだ己が國を救ふメシヤであり、律法を完成し、預言を成就し、ユダヤ民族が神の選民たる使命を完くせしめし眞の愛國者であり給ふたのである。ユダヤ民族はイエスを産出した事に由つて其の國粹を永遠に且つ全世界に輝かしたのである。

イエスを眞に深く理解した使徒パウロも亦甚しくユダヤの國粹主義者ユダヤ的基督者により迫害せられ、遂にその國人よりロマ官憲に叛亂教唆者として付された者である。そしてイエスの眞神はイエスの地上の御生涯中常に師侍した數多の弟子たち以上に、肉に於て彼を知ること甚少なかつた此の異邦人の使徒パウロが代表し、ユダヤの一隅に發した基督教をして、眞に全人類の宗教とし、ユダヤの精華を全世界に輝かしたのである。

エレミヤは如何。彼は己が愛する國の亡國に瀕せるを見て、國民に悔改めて眞の神エホバに歸へれと絶叫した。國の前途を憂ひては彼の腸は斷ち、彼の眼は涙の泉となつた。然かも國の滅亡は國民が眞の神を棄て、物質的なる偶像に仕へたるため神の刑罰であることを洞察し、之に服するためバビロンへの屈從を勸告したのである。

此の勸告は當時の僞愛國者たちをして彼を賣國奴として迫害せしめるに充分であつた。彼はそのため度々九死に一生を得た。然かも愛國の熱情と神に對する絶對の信従は、神の彼に示し給ふまゝに、其の御言を國民の前に宣傳へしめて憚からず、國民の背教に對する神の嚴なる審判、その鞭としての亡國、然かも神は先祖たちに與へ給ふた約束に忠信にして、決してその民を棄てず、假令國滅び、神殿は荒塚となることも、神はその民をして國を再建せしめ、永遠にイスラエルの民の榮光

となり給ふことを預言したのである。

國滅び、その民バビロンに移されて後、イスラエルの民は始めてエレミヤが眞の預言者であつたことに氣が付いたのである。彼らは己に遣はされた預言者の言とその生涯を思ひ出で、神が此の預言者を通して與へ給ふた其の國再建の約束を信じて一致團結し、異國の偶像を拜することなく、其の風習に感染、歸化することなく、民族としての存續を全くし、遂に再び故郷に歸へり國を建つるを得た。そして其の民族の裔よりナザレのイエスを出し、パウロを出し、ヨハネを出し、今日尙世界的人物を輩出せしめて已まないのである。若しエレミヤなかりせば如何。ユダヤ民族の光榮は永遠に失せたであらう。眞の愛國者とはかゝる者を云ふ。かゝる預言者が其のうちにあらば、假令國は滅び、民は異境に流浪することも、國は再建せられ、若しかゝる信仰が一家のうちにあらば

破滅せる家は再興し、個人にあらば絶望のどん底より再起し得るのである。

クロムウエルは如何。チャールズ一世王の無謀なる信仰の統一、儀式の劃一勵行のため、英國民は良心による眞の禮拜を禁せられ、只心にもなき外見の儀式に従順であり、國定の信仰箇條を口にせば、それで忠良の臣民とせられた時、信仰の自由獨立のため立つて一時英國を清教主義の支配の下に置いたのである。そしてその餘慶は遂に今日の大英世界帝國となつた。然かも彼は生前死後人々に誤解せられ、彼程王の忠良なる臣、誠實なる愛國者が奸雄策士偽善者等の汚名を衣せられて百年の久しき間何人も之を疑はなかつた。

されど『世界歴史は世界裁判』 Welgeschichtreist Walgerichte である。眞の愛國者は早晚其の眞價を知られる。假令永く人々に無視せられ、輕蔑せられ、迫害せられ、又生命を奪はるることも、神は活

きて在し給ふ。彼に對する絶對の信頼の下に眞實國を愛し、將來の國運の進展を計る者は、神自ら之を支持して、神自らの榮光を擧げ給ふのである。我らの唱ふる聖書の眞理は之である。我が國人が聖書に由つて立ち、一切を擧げて神の榮光と主イエス・キリストの顯現のために献ぐる時、當にそれは教育勅諭を實行して、又弛緩した國民精神を緊張し得るのみではない、その時こそ我國民は世界に對して大なる使命を果す時である。

今や西洋文明の衰退を説く者は多い。何故の衰退であらうか。それは彼らの父祖の信じて居た神の絶對的恩恵、主イエス・キリストの贖罪による義、即ち純福音を棄て、あらゆる此の世の知識を慕ひ、之を淫して自らの力によつて現世的物質的享樂的利福を追ふがためである。此の反福音的物質的思想は滔々として我國に入り來り、或は不健全なる文藝となりて人心を頹廢せしめ、或は鬭爭

掠奪の暴力となつて産業を衰退せしめ、或は反抗の精神となつて學校騒動を起し、或は不正不義の成功主義となつて政治を腐敗せしめ、我が國礎を覆さうとして居るのである。

此の國を救ふものは唯一つ。それはキリストを信する信仰以外にない。眞にキリストを信する時何人も經驗するところの彼に在る新生命の飛躍、高翔がある。大理想は前に輝き、大なる希望は目前の苦難を突破せしめる。歡喜平安は心を領し、大なる創造力は勃然として起る。かゝる大なる賜物をもてる我ら基督者の任務は實に重且つ大である。日本國の將來は我らの双肩にかゝつて居るのである。されば諸君、お互に信仰によつて立うではないか。内村先生の一生は實に此のために献げられたのであつた。(終)

(前號芳賀博士は落合直文博士の誤)

柏 木 通 信 (第二信)

齋 藤 宗 次 郎

活けるキリストは約束の御靈を賜ひて私共を慰め教へ導き給ふた。私共に取りては之に勝る賜物は無い。翳める目より鱗は落ち、凍れる心は靈に燃えて、教友の生涯は漸次光の加はるを感じた。

中にも有りがたきは安息日の聖守である。之は最大なる恩恵の一である。勞して耕し勞して産むべく定められしアダムエバの裔たる私共も、安息日を一週の初に與へられしことによつて、此世ながら天國の空氣を呼吸することが出来る。安息日は所謂休日ではない。祭日ではない。無論嬉戲遊樂の日では斷じて無い。心を盡して榮光の神を頌讚感謝すべき日である。罪より解かれし幸福の子等主の御名によりて相集り相睦みつ、聲を和して父なる神に力一杯よびかける日である。未だ救ひに預らぬ愛する無數の同胞の爲に神の憐憫を祈るべき日である。天の父は惜みなく彼等二心なき者の靈と肉とを最善のものにて満し給ふ日である。想へば義務の鞭撻、莊重の儀式、智慧の憧憬、而して自己満足。此事を以て聖日に向ふとは何たる淺ましき心ぞ。

我にありては凡ての日皆安息日なりと豪語するも理窟である。此事に就て全世界の信徒大に反省悔悟するの要なきか。妄りに恩寵の特權を拋棄して偶像の虚禮に陥るは此上なき不遜である。私共は此精神を明かに示さるゝと共に、絶えず巡り來る日曜日を言ひ難き歡喜を以て迎へた。

既に晩春は去つた。初夏も暮れた。聽て炎熱の七八月は臨んだ。一回の休みもなく集會は守られた。其間、石原、大島、南原、植木、三谷、藤本、石河、西岡、名古屋、矢内原、山柁、大賀、盧、鈴木、政池の諸氏交々起たれて、主に學びし眞理、味ひし實驗、啓されし感想を謙遜に語つた。會衆はそれを透して只管に三位の神を稱へた。然して毎回數名の兄弟姉妹は靈に感じて祈つた。彼等の感謝の範圍祈禱の區域は極めて廣くあつた。幾多先輩教友によつて開かるゝ主の集會、祖國同胞の靈魂は勿論、人類も宇宙も其細き切なる祈の聲に包まれて、エホバ神のみに香煙の如く昇るを觀た。此望み此寛容此同情此熱愛は夫れ何處よりぞ。

柏木教友會は主に在る同信の友の集ひである。之を圍む溝渠も障壁もない。其四邊は無限の開放延長である。隨つて單純に主の十字架を仰ぎ、其復活の望みに生くる兄弟の

こと、あれば時と所とに差別なく、深き興味を牽き起して同情の胸が躍る。私の報道が柏木に局限されぬ場合のあるは之が爲である。恩師召されて後、其教と愛に浴せし人々各自の職分力量に應じて、謝恩の實を表はし福音證明の責務を果す爲に紀念會を開きたるは、眞に美はしき事實である。

四月十三日先づ横濱關東學院に於て坂田、山榊、時田の諸氏によつて開かれ、請ひに應じて私は恩師の臨終を涙ながらに述べた。其月末には神奈川會館に於て開かれ、塚本、畔上、藤井の三氏主の獨立無教會信仰の爲に熱血を吐き、越えて五月十八日大阪、十九日岡山、二十日京都、二十一日名古屋に開かれ、畔上氏が至誠を以て諸方面より見たる恩師と其事業とを紹介し、私も末席に立つて生ける事實を傳へた。其二十八日には東京青山會館に於て藤井氏外六名の大講演會は開かれ、翌六月二十九日には柏木に於て紀念會は開かれ藤本、石原、淺野、塚本、畔上の五氏強く恩師の使命天職と共に吾等の責任を明かにした。

次に黎明日本の前途の爲め祝すべき一事は、六月上旬藤澤吉氏の獨立堂書房開店のことである。氏は四十年前恩師の下に外務大臣たらんとの望みを懷いて、北信の山中よ

り出て來りし人。一たび恩師の教化に觸るゝや、生活の方針は肉より靈に轉じ、今や眞理の糧を國の内外に鬻ぎて、精神界に於ける外務大臣の職責を握ること、なつた。此不信國に在りて成敗は問ふ所でない。飽くまで獨立信仰の立場を守つて決死の前途を續けるのみこの告白を聞いて同情同感に堪えない。

終りに一の森嚴なる攝理の事實を報ぜざるを得ない。それは藤井武氏の永眠である。氏は昨春病褥に在りて不圖内村恩師の訃音に接するや、直ちに重患絶食の瘦軀を提けて起ち、基督の福音と日本帝國の爲め、想に奥妙を極め、言に烈火を放ち、筆に銳鋒を揮ふの壯舉に出た。此驚くべき犠牲の奮闘は、人々をして異狀時に於ける聖靈の尊き活動に感泣せしめたのであつた。私共も亦幸に面の當り此預言者の聲を聴き、献身の態度を自撃し得たのである。天命は見事に果てた。七月十四日氏も亦召されて天上なる先祖の列に加つた。此信仰の勇者の告別式は、柏木なる今井館に於て、教友知己の懇ろなる手によつて営まれた。此世の歴史家の眼には映ぜぬかも知れぬ。去れど彼の叫びし眞理の生命は、恩師の遺業と共に新日本を建設せずば歇まぬであらう。

編輯餘錄 主筆

○二宮尊徳は、貧者は昨日のために、中産者は今日のために、そして富者は明日のために暮す云つた。雜誌記者は二週間のたために暮す大富者でなければならぬ。現在の身邊のこゝを書けばもう月おくれとなる。

○昨暮、近所の可愛い子供たち四十人、それに父兄を加へて部屋は一杯、日曜學校のクリスマス祝賀會を開いた。楽しい一日であつた。此の一年間此等の子供たちに熱心に宗教教育をされた塾の脇屋俊雄君及び川西夫人とそれを助けた妻の三人の勞を感謝した。私は此の日我國の日曜學校教育につきある暗示を與へられ、今後研究し度く思つた。又本年初鎌倉聖書塾と柏木教友會聯合の感謝懇親會が開かれ、近來こゝに愉快な楽しい會合はなかつた。同じ信仰による交の如何に祝福されたものであるかを實感した。

○一月號は六千部刷つた。本誌としては空前で且つ絶後かも知れない。鎌倉は無風帯だ云つて居たが、或人が今では旋風の中心だ云つた。又他の人は内村先生逝去後、最重要の *Message* をとりつゝありと云ふ。旋風は周圍に動搖を與へるかも知れないが、その中心は無風である。鎌倉は今なほ平靜である。『いざ鎌倉』など云ふ時のいつまでも來ないことを祈る。

○一月號を見て本誌はカトリック主義の機關

誌だと評した友がある。その人は親切に大真面目であるが私はそれを讀んでふき出した。多分同じく主に在つて親愛なる兄弟カトリックの諸君が之を聞かれたならば、そんなことを大きな聲で言つてくれるな、こちらがきまりが悪いと言はれるであらう。近年傑作の與太として餘り面白いのでこゝに載せる。

○一月號の教育勸語と内村先生を讀んで泣いたと言ふたよりが數通あつた。來月號には先生の日清戰爭義戰論を紹介し度い。戰爭の大謳歌者がどうして大非戰論者となり、遂にキリスト再臨待望者となられたかにつき多少參考とならう。私の興味は先生は理論の人主義の人でなく、いつも事實を精しく觀察し、その真相をつかんで、その上に立たれた人であつたことである。事實に即せずと見て取らば何時でも變説改論を斷行された。事實に根據を有せず、體驗を経ざる主義はどんな主義でも益はない、自他を傷けるばかりである。生活に困らぬ學生は種々の知識、新奇な理論を喜びが、我ら自活の道を切り開いてゆかねばならない者には、何よりも生活力がほしい。正しく強く生くる精神がほしい。それは理論でない、生かす力である。

○近來強く感ずることは人生に於ける罪の實在であつて、人間の力ではどうしても之から脱することは不可能、只神の恩恵による外ないことである。全く自己に絶望して始めて基督教の眞體が理解出来ること云ふことである。

聖書の眞理定價 (送料共)

- 一部 二十錢
- 半年(六部) 一圓十錢
- 一年(十二部) 二圓十錢
- 海外一年 二圓六十錢

拂込は振替東京六三三七五番
聖書の眞理社又は東京七七四
二番思想と生活社宛
○思想と生活合本値上
舊號に缺號生じ且つ合本殘部僅少のため特志家へのみ頒つ

- 第一卷 二圓 送料八錢
- 第二卷 一圓八十錢 送料六錢
- 第三卷 二圓三十錢 送料八錢

昭和六年一月二十五日 印刷
昭和六年二月一日 發行

神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三三四三
編輯印刷 江原萬里
兼發行人
東京市外濠谷町向山九七
發行所 聖書之眞理社
名古屋市中區流川町一八
印刷所 一粒社印刷所
東京市外柏木九四六
發賣所 獨立堂書房
振替東京一九四六八番

新著紹介

河合榮治郎著 トマス・ヒル・グリーン
の思想大系 上下二巻

東大教授河合君が歐洲留學前から十年の研究の結果此の著を公にせられた事を同君の同窓の親友の一人として甚だ祝賀す。本書中グリーンンの宗教論は同君から之を熟讀する機會を與へられ、彼の有名な道德學說も又本書の主眼たる彼の社會思想も、其の根柢はロマ書六章に在ることを發見して愉快に思つた。彼はクロムウエルと共に活動したベーンの影響を受け、彼の社會思想を指導した精神は實に清教徒主義であつた。私はこの位深く清教徒が英國に貢獻して居るかの證據を本書で知つた(定價上四圓、下五圓)。

畔上賢造著 ロマ書註解

畏友畔上君が多年内村先生に師事して研究遂に完成せられたロマ書の私譯と註解である。ロマ書については著者自身の筆記にかゝる内村先生の羅馬書の研究があるが、それは一字一句の註釋でない。本書は之を補充して讀むに甚だ有益である。蓋し同君快心の著作らしく見える(定價二圓八十錢、一粒社版)。

山谷省吾著 新約聖書、新譯と解釋

パウロの書翰を原語から極く平易なる口語體に譯し、之に添ふるに簡明なる解釋を以

てし、從來の註解書が特に學徒用であつて、平信徒には稍親しみ難い感があつたのを補はれ、堅實なる研究の平易化を試みられたものである。著者は之をその生涯の事業として敢行せられ、先づテサロニケ前後書及びガラテヤ書から始められたものである。此の事業に對し多大の尊敬と感謝を表明し度い(定價一圓四十錢)。

黑崎幸吉著 註解新約聖書ヨハネ傳

曩にコリント前後書、次でマタイ傳の註解を公にし、最近我國に於ける此の種の註解書中隨一の好評を得たる著者は、更に多くの勞苦と之がために病を得るも意とせざる熱心とを以て今ヨハネ傳の註解を著はされた。私はその犠牲に對し心から敬意を表する者である(定價一圓四十錢)。

聖書雜誌リーフレット

鈴木俊郎主筆 新約之研究

一部 二十錢 一年 二圓四十錢
振替東京五一〇七五番新約研究社發行

西岡虎造主筆 キリストの福音

一部 五錢 一年 五十錢
振替東京五〇二二六番基督之福音社發行

前記兩者共研究に體驗に今後信仰上貢獻されること多からんことを私は期待する者である。

以上の著書雜誌は獨立堂にて取次ぐ

内村鑑三著 (第七版發行) 羅馬書の研究

菊版七百數十頁總布背皮裝函入
定價五圓五十錢送料書留内地三十錢
臺灣五十錢

本書は新約聖書の中心たる羅馬書の解説である。基督教の福音的根柢は明かに世に提示せられ、罪と救、キリストの十字架、人類未來の運命等について深き説明がある。基督教の希望と同時に、人々に眞の歡喜と平安と義明とを供す。羅馬書の研究はたゞ一つの古文書の研究ではない、基督教の中心的生命に觸れ、神が人類のために備へ給ひし救の大業を悟るにある。

聖書之研究合本 各一冊

昭和二、三、四年度 各送料廿七錢

同上五年度合本一冊

金一圓六十錢 送料十八錢

聖書研究舊號分冊數百種あり一冊十錢以上種々東京獨立雜誌其他絶版もの數種あり御望みの方は二錢切手封入御照會を乞ふ。

(營業目錄送呈)

聖書讚美歌 東京淀橋町柏木九四六
基督教書類 獨立堂書房
新古書籍類 振替東京一九四六八

電話四谷三、一九三呼出

定價二十錢

(昭和三年二月十六日)

聖書之眞理

第四十號

昭和六年二月一日發行
(毎月一回一日發行)